

KSKQ

ゆうとおん通信

NO.110

2018年 11月号

郵便振り込み口座 00910-9-106532

編集人 (社福) ゆうとおん ゆうとおん編集員会 八尾市久宝園 2-30-4



伊藤 美津子 (いとう・みつこ)

1956年大阪府生まれ。難波養護学校中等部を卒業後、府立金剛コロニーに入所。2008年に地域移行。ゆうとおんのホームで暮らす。62歳。

去年、大きな病気をしてお腹を切った。退院したらご飯は食べられへんようになって、また入院。腸ろうの手術して今は4時間かけてミルクみたいなものをいれてる。ほんまいいたら、やりたくない。目標はご飯たべること。最近食べられるようになったよ。この前もアリオで、お好み焼き一枚。おいしかったわ。

私、ゆうとおんに来る前は、金剛コロニーにいた。長いこといてたよ。34年間。木に穴あけて、しいたけ作っていた。できたやつは袋につめて売って。外食や買い物は楽しかったけど、ほかのこと、みんな忘れてしもた。

ここで、生きる

人シリーズ No.8

ゆうとおんに来てからは、クツキ作りをがんばってた。まるめる作業。オープンがあるからすごく暑かった。いまは、内職してる。

9月のゆうとおん一泊旅行、楽しかったわ。伊勢神宮、遠かったけど車イス使わんと歩いたし、赤福も食べた。伊勢うどんもおいしくて、ぜんぶ食べたし、水族館のショーもよかった。みんなはセイウチにさわってた。また来年が楽しみやわ。

【話をきいて】

笑顔のすてきな伊藤さんですが、伊藤さんの右にでる人はいないほど、いったん決めたらテコでも動かない意志の強い人。負けそうです。実際負けてます。そんな伊藤さん、いつも裏で職員を支えてくれる心強い味方です。「〇〇さん、いてへんようになったで！」どれだけ助けられたか。今後もしょくです。

(聞き手…富澤 久美子)

目次

- ・8/25 夏期研修報告 参加者の感想 (2)
- ・一泊旅行に行ってきました (6)
- ・虐待について考える No.3 堀 智晴 (8)
- ・研修報告 栗野 真人 (9)
- ・当世作業所事情 72 「自分たちを律してみる」 畑 健次郎 (10)

2018 8/25(土)夏期研修 報告

それでも、関わり続けるために

～ 罪を犯した障害のある人の支援をめぐる ～



この夏、数年前からお付き合いのある東京多摩市の「たこの木クラブ」や「フィットする支援をめざす会」との交流会の話が持ち上がりました。会のみなさんは、いま遠く離れた地方の刑務所で服役する男性の支援を何年も続けています。男性が地域にもどるのはまだだいぶ先のことで、活動の現状を聞きながら、私たちだけの内輪の交流会で終わらせるのではなく、この問題に関心のある外部の方にも参加してもらい、生きづらさや生活に困難をかかえる当事者の支援について一緒に考えていける企画にしたいと思うようになりました。当日は70名の参加がありました。講演と事例発表の要旨、みなさんの感想を掲載しました。

基調講演

第1部 13:30～14:45

「地域で支え続けるために」

講師 中川 英男 氏

(滋賀県社会福祉士会 会長・元滋賀県地域生活定着支援センター 所長)

【要旨】支援の方向性は再犯防止ではなく当事者が「犯罪から離脱」した生き方ができる主体性の回復と、それを実現できる居場所作り、信頼と安心感の持てる関係性を築くことにある。地域生活はトラブルや再犯リスクが高まることもしばしばだが大事なことは犯罪行為に隠れた本人の生きづらさに対する包括的なアセスメント。よりよい生活を目指しつつ支援者は不調時や危機対応に備え本人と一緒にクライシスプランを立て地域生活を継続できるように支援することが大切である。

事例発表

第2部 15:00～16:50

事例① 岩橋 誠治氏 (たこの木クラブ代表 東京都多摩市)

9年目に入った受刑生活を送る男性とのつながりは手紙と面会のみ。刑務所では落ち着いているが地域生活でその安定は維持できない。受刑中の支援課題についての問題提起。

事例② 富田 忠一氏 (社会福祉法人ちいろば会 統括管理責任者 奈良県)

暴力事件を繰り返す男性と関係の持ち方、距離の取り方について模索が続く。支援者の不安や恐怖心も大きい。暴力の奥にある本人の不安にどう関わりながら自立生活を支援できるか。

事例③ 豆子 寿士氏 (NPO 法人ラルゲット 代表 大阪市)

出所後支援で関わった男性の順調かに見えた生活。ストレス対応が不十分で再犯に。最後は余命いくばくもない状態への関わりだった。本人の「力」になる支援について改めて考えた。

ゆうとおん職員の感想

・事例とその背景にある理論をたくさん聞けてよかった。関係を切らず作っていくことが大事。「包み込む」「振り返りを勧める」の分担大事。地域、とても大事。「再犯をさせないように」ではなく、その先の「生きていてよかった人生」をお手伝いできる支援者になりたい。そのためにも細かい変化を見逃さないように注意したい。

(グループホーム・世話人)

・毎日どう関わっていけばいいのか奮闘中です。当事者の心のみや、見えない部分など、知るための術(情報)には限界があります。何故? という疑問は数多くありますが、日常の私たちの言動、本当に注意しなければならぬことだらけだと反省しました。来週からまた心新たに、ひとりひとりに丁寧に向きあっていければと思います。

(生活支援員)

・暴力暴言があるメンバーさんがいるのですが、私自身もカッとなり暴力はふるいませんが、あらい言葉で注意する場面があります。本日の研修をふまえ、がまんする心を持ちそのメンバーさんと距離を持っていききたいと思います。(生活支援員)

・①ケース報告が3例、その内容は具体的に考えさせられる点が多くあった。しかし、時間がなく一面的な議論にとどまったのではないかと。もう一步深めた議論がしたかった。②専門的なかかわりの大切さに気づくだけの研修会にとどまったのではないかと。専門的なかかわりを否定するつもりはないが、それだけでは不十分で問題がある。なぜなら日常的に利用者や当事者とかかわる我々自身がどう自分なりに悩みながらも、どう職場で職場の仲間たちと協力し合って経験を積み重ねていけばいいか、この点を考えることこそが大事なのではないか。③事例が触法障害者、罪を犯し留置されたケースで、むつかしい事例であるので、このようなケースは専門性の強い対応が必要になるのも理解できる気持ちもある。しかし、このような姿勢、つまり安易な対応や、ささやかな積み重ねではダメだと思ひ込みこそが、この障害者自身を特別扱いすることにもつながっていると言えるのではないかと思う。④「地域で支え続けるために」というので、地域の人々が登場する報告は岩橋さんの報告にはあったが、もつとあってもいいのではないかと思った。⑤4人の発題者の最後のことがあった。コンビニをぼこぼこにしてもらえることがあった。コンビニをぼこぼこにして(注・事例岩橋氏の報告)、その店の人が「どうしたの、今日は?」というのはすごい。

(法人役員)

・お話の中に日々の悩みのヒントがたくさんあったように思います。「居場所感を築く支援」というところ、私自身や職員集団としても、どのような場がそうであるのか、きちんと深めていかななくてはと改めて思いました。

(相談員)

・中川さんが講演のなかで「否定的な言葉はいわない」「相手の行動を否定しない」という話を聞いていました。ついつい私たちは相手の行動を責めたり「正しい」行動を求めたりします。相手を尊重する気持ちは置き去りにしがちです。当事者の方と「居場所感の持てる生活の場」を作っていくためにも否定的な言葉の投げかけではなく私の気持ちを伝えたいと思いました。豆子さんの「この人に出会えて良かったと思える連携や支援でなければ当事者自身の力になることはできない」という言葉に重みを感じました。自分も相談員として担当させてもらっている当事者の方がいます。みなさんは私に相談したくて相談しているのではなく担当だから相談しているのだと思います。「この人に出会えて良かった」と思ってもらえるように関わり続けたいと思いました。

(相談員)

・触法といったようなことではなく、日常の作業所での自分の役割を改めて再認識することができたとします。

(生活支援員)

外部参加のみなさんの感想

・事例発表で「暴力事件を繰り返してしまうMさん」の話をして下さった富田さんの話が印象に残っています。特にいいなと思ったのが「助けてカード」という独自のカードを作られているというお話で、個人的にもこれがあったらいいなと思いました。他にも、周りと本人、そしてクールダウン的な入院のところもすごく考えさせられますし課題になると思います。今後も日々考えながら成長できたらと思います。

(生活支援員)

・中川さんの体験からのお話、大変わかりやすく感動しました。うまくいかなかった話もできたら聞きたかった。3人の方々の事例発表、それぞれ重たいものがありました。かかわっていく継続の大切さがよくわかりました。

(法人役員)

・障がい者が事件を起すと世間では「あー、やっぱりな」だから離しておけって」といった声(投稿)がたくさん出てきます。私は異業種からの転職組で、この仕事に就くまで上記のような思いでした。しかし、関わりのなかで、彼らが自分自身を表現する方法を持たない、あるいは下手であることが少しずつ解るようになりました。支援員は注意しないと指導員のような態度、言葉を発してしまいがちです。彼らの声をどう聞きどう表わすのか、ここを精通したいと思います。

(世話人)

・事例発表が三者三様で、それぞれに身近で支援している当事者の姿とだぶり、色々な想像を働かすことで今後の支援のヒントにしたいと思う。現場の話はためになる。

(ヘルパー)

・つながりの少ない状況に置かれている人と出所後関係性をどのように作っていくか、作っていくのか、難しい問題だと感じました。地域で支えていけるような基盤作りや支えていける仕組みがあれば本人を含め誰にとってもいいとは思いますが一筋縄じゃない部分も感じます。自分にできることは少しでもやっていきたいと思うし、考えていきたいと思うので何か一緒にできることがあれば、お声かけて頂けたらと思います。(介助者)

・表面的ではなく内面的な部分も含めた支援、ふだんから考えることですが、今回のケースではいっそう求められ、大変な部分いっぱい、それでも関わり続ける、それしかないだろうとあらためて思いました。

(生活介護等事業所・管理者)

・この研修を企画していただいたゆうとんの皆様に感謝します。本人や支援者は犯罪をさける方向、犯罪をおこす原因を掘り下げて研究している一方で罪を犯して社会に戻った時の社会の受入れはとておおくれているとかねがね感じており、どのような働きかけをすればというところも参加の皆さんと今後は連携できると良いと思います。

今日のお話を聞いて専門分野のお話がとても参考になりました。例えば、愛情と憎しみの感情のコントロールなど。事例を聞かれて良かったです。

(フィットする支援をめざす会)

・とても勉強になりました。体験談も入った話もあり、とてもイメージがつきやすく、話が聞けて良かったです。レジュメもとてもわかりやすかったです。

(自治体ケースワーカー)

・地域で支え続ける、つながり続ける苦勞を聞かせて頂きました。私たちの団体も同じく地域で支えています。共通する苦勞や体験多くありました。スタッフ同士、地域の方々との関わりに差が大きいこともあり大変です。それでも続けられるモチベーションや共通した認識をどう持つていくのかは課題です。

(グループホーム・スタッフ)

・その人とつながり続けること、一人ではなく何人かで支援を行い役割分担する、今日の話の内容は私たち障害当事者の地域移行への話につながりました。

(ヘルパー事業所)

・包括的アセスメントについて

○生育歴・生活歴のような長いスパン+「ごく最近の暮らしの中でどんな出来事があったか、どんな思いを抱えていたか」を探っていくことも本人にとっての大きな背景に近づいていく上で必要だと思う。○「環境」のなかに支援体制側も含めて見立てをしていくことが不可欠だと思う。統一的に「間違った支援」をしていないか、支援者側の関わりや解釈の誤り(ズレ)が本人のストレスや犯罪行動と関連していないか。

・出所後の関係構築の中で本人にとって重要な存在(例…金銭管理者)がいることが行動の落ち着きにつながるがある一方、奇妙な権力関係が生まれてしまう別のリスクも頭の片隅においておきたいと思った。

(相談支援専門員)

・岩橋さんのコミュニケーションは二者間にあるもので障害ある人ばかりが苦手扱いされる、本人が理解していることを理解することができていないというのは私自身耳が痛く、日常の業務で気をつけたい。

(グループホーム・スタッフ)

・自分自身、罪を犯した当事者の方々と関わった経験が数少ないですが、貴重なお話をたくさん聞かせていただき有り難うございました。自分自身が当事者とうとう関わっていくのか、また地域の中で当事者がどう生きていくのか、生きやすくしていくのか、日々自問自答しながら関わっていききたいと思います。

(生活介護事業所・スタッフ)

・スタッフも地域の中で一緒に生活する視点を忘れずに当事者の方の気持ち等を受け入れられるようになりたいと思いました。(事業所・スタッフ)

・事例を通して背景に対する見立てについて学べたことと、生育歴として個々に人生をしつかり見つけていくことが大切であること、ご本人の存在を認めていく糸口になることを感じられました。

(相談支援専門員)

・皆さん、仕事としてのかかわりの中で、もちろんそれをこえてのかかわりをされていると思います。が、その辺、労働者(職員)の労働環境の管理とかどうされていますか? 自分自身ももっと関わりたいと思っても、ストップが管理者からかかりモヤモヤすることが多いです。

(相談支援専門員)

・自分の行動を認知出来るような働きかけが大切なんだと感じました。どう相手に伝えるか、実際相手はどのように受け止めているのかを頭において関わりたいと思いました。支援する上で改めて生育歴を見直したいと感じました。

(生活介護事業所・職員)

・中川先生：理論的な話を実際の現場の事例を交えながらとてもわかりやすく話されていた。結局のところ当事者が自己肯定感の持てるような環境(支援体制)をどのように築いていくかに尽きるのではないかと思った。あくまでも当事者に対して肯定的に対等に関わっていくという点が印象に残った。

岩橋先生：関係を切らない。コミュニケーション(互いに築いていくこと)の大切さがひしひしと伝わった。富田先生：すさまじい状況のなかで支援し続けていく根性を見た。職員定着率が悪くても、あくまで利用者側に立つその姿勢は見習わなくてはならないが現実自分には難しい。

豆子先生：犯した罪については着目せず本人の生きたい気持ちに最後まで寄り添う徹底した姿に感服した。

(居宅介護事業所・管理者)

いっぱく りょうに行ってきたよ。

2018.9.13(木)～14(金) in伊勢 レポート

8:45*はるやまに集合

9:00*出発!!

13日



10:20*名阪上野S A
にて休憩



ごはんが
おいしかった
(藤田)



伊勢神宮とか
楽しかったです(尾崎)

12:20～15:10
*おかげ横丁到着
伊勢神宮等を散策



踊ってるのが
一番面白かった
一緒に踊った
(西矢)

ごはんが
おいしかった
(徳山)

赤福のおもちのかき氷が
美味しかった(中川)

踊りがうまかった(宮田)

15:30*鳥羽シーサイドホテル到着

15:30～大浴場にて入浴

18:00～21:00*宴会

22:00*消灯





17:00
*ゆうとんほーぷに
到着&解散!!!

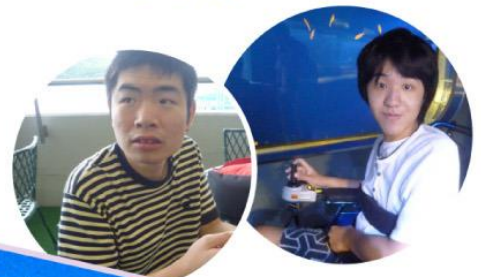
伊勢市たのしかった
(益山)



15:10*名阪上野S A
にて休憩



12:10*昼食
13:00*出発



鳥羽水族館



おもしろかった
(小林)

ゆっくりした
写真撮ったよ
楽しかった(湯山)

おもしろかった
がんばった
(谷口)



9:40~12:00
*鳥羽水族館にて
自由行動



動物みたよ
森

水族館がよかった
(西村)



7:00*起床

7:30*朝食

14日

おいしいもの
食べたよ(中矢)



堀 智晴（ほり・ともはる）

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。インクルーシブ（共生）教育研究所代表。
ゆうとおん監事。

No.3

虐待について考える

「絶対に変わらない」とみている！

虐待について考えるとき、職員が利用者をどうみているのか、これが問題になります。とくに知的障がいのある人を職員がどうみているか、について考えてみる必要があると思います。

先日、ガイドヘルパーをされている人たちと話してあったときです。何人ものガイドヘルパーさんが、この人たちは（知的障がいのある人）は「絶対に変わらない」と口をそろえて、言うのです。正直私は、びっくりしました。「ぜったい」と言うのですから。

たとえば、利用者さんが糖尿病なので、ジュースやコーヒーを飲みすぎだり、甘いお菓子を食べすぎたりしないように注意しています。外出時にも、この点を注意してヘルプしています。「さっき飲んだばかりでからだによくありませんよ。もうだめですよ」と飲まないように言うと思います。実際の場面では、ヘルパーさんは柔軟に判断されていると思います。しかし、なかなか注意して聞いてもらえないという経験をしているのも現実です。

あるいは、利用者さんにはそれぞれその人なりのこだわりがあります。たとえば自分の好きなモノが

ありますね。そのこだわりは「こだわり」ですから、そう簡単になくなりません。このようなこだわりは、利用者さんに限らず、私もそうですが、どの人にもみられるものでしょう。しかし、仕事や外出支援のとき、このこだわりで職員やガイドヘルパーさんが困る場面もすくなくあります。そして、利用者さんを「変わらない」とみるのです。

ヘルパーをする中で「絶対」と思うようになる！

冷静に考えてみると、生きている限り「絶対変わらない」とは言えないでしょう。しかし、です。私が話したガイドヘルパーさんたちは何人もの人が、口をそろえて「絶対に変わらない」と何度も強調して言われたのです。

言った後で言い過ぎたかな、という空気も感じませんでした。それは、支援やガイドヘルプ活動をしてきて、つまりそのような経験を積み重ねてきて、そのような確信をもつようになってきたからです。だからそう言うてはばからないのだ、と私は思いました。

すごいな、おそろしいなと思いました。これこそ、知的障がいのある人に対する偏見がどこかに根強くあるのではないか、このことを考える必要があると思いました。

今回は、このような問題を読者の皆さんに投げかけて、終わりたいと思います。

皆さんはどう考えられますか？

研修報告

2018/7/30～8/3 社会福祉法人フォレスト福祉会 風の森（柏原市）

栞野 真人

ゆとりのある職場 研修を終え印象的だったのは、職員一人ひとりが気持ちに余裕を持って支援をされているところでした。まず、「時間的な余裕」と感じた部分は、短時間ですが職員一人ひとりが自由に過ごすことが出来る昼休憩を確保されていたこと、サマータイムの期間を設け、通常の勤務時間よりも所属長の許可をもらって少し早い時間に退所できる制度などがありました。次に「人的な余裕」では、「人員の豊富さ」や「連携の取り方の良さ」、「意見の出しやすさ」などが印象的でした。所謂、重度と呼ばれる人たちを支援されていた班は、6人の利用者さんに対して5人の職員がしっかりと声を掛け合い対応されており、余裕を持った体制で支援を行うことができていました。もし調子を崩される等の異変があれば、直ぐに1対1の対応に切り替え対応することができると話されており、こうした人員配置は、不要な心配事が無く支援に専念することができ、気持ちの余裕に繋がっているのだと感じられました。また、弱い立場になりがちなパート職員や若手職員の意見が反映されやすいように、所属する班の会議では自由に意見を言える雰囲気作りをされていました。直接的な支援とは少し離れた部分ですが、こんなところも気持ちに余裕を持った支援に繋がっているように感じられました。

意識の高さ 次に一人ひとりの職員の意識の高さでした。重度の利用者さんに関わっていた職員の方は、気持ちが落ち着かず、作業や日中の取り組みにあまり参加が出来ない利用者さんへの支援として、まずは、気持ちの安定に重きを置いて支援を行っていると話されていました。「気持ちが安定することで少しでもできることが増えるのでは？」と考え、作業よりも一人ひとりの利用者さんが、精神的に落ち着ける環境作りを優先する支援が行われていました。こうした、統一した考えを共有されていた点は、支援に携わる職員の意識の高さだと感じました。また、風の森では、役職制度を取り入れており、それが意識の高さに繋がっているように感じられました。主任や班長の方は、こういった流れで一日の支援を行うかを常に考えて指示を出されており、見習うべき要素も多いと感じました。ゆうとおんの現場では「誰かが考えるだろう」、「誰かがやるだろう」と他人任せになっていることがよくあり、改善すべき課題の1つだと思いました。

記録の取り方 意識の高さは、日々の支援の記録や、家族に様子を伝える連絡ノートの内容にも出ていました。支援記録の内容は、当然ですが同じ文章がコピーの様に貼り付けられている日は、一日たりとも無く、利用者さんがどのような様子で一日を過ごされたか簡潔に記録されていました。研修中に記録の話をして下さった職員さんは、日々の記録をしっかりと書くその後日様を確認でき、支援計画を立てる際に役立てることができ、新しく関わる職員も利用者さんの様子を知ることができると教えて下さいました。次に、連絡ノートの記載内容についても話をして下さいました。家族には、ありのままの利用者さんの様子を知ってもらう為に、都合の悪い部分も含め、全てを記載するように心がけているとのことでした。以前は、悪い部分は家族に不安を与えると考え、伝えずに隠していた時期もあったそうですが、利用者さんの状態が事業所だけでは包み込めなくなってから、協力を仰ぐために家族に現状を伝えたところ、「もっと早く伝えて欲しかった」とお叱りを受けた経験もあり、現状を包み隠さず伝えていくと教えて下さいました。さて、ゆうとおんの現場での実情を見ると、ありのままの様子どころか、どのように一日を過ごしたのか分からないようなノートや記録を書いている職員もあり、家族との連携の取り方については、今後の大きな課題だと実感しました。

おわりに

風の森での研修から帰ってくると、「研修先はどうでしたか？」と何人かの職員から聞かれ、ゆうとおんとの違いを体験でき良い機会だったと話をさせてもらいました。研修に行ってみたいという常勤職員や、パート職員の方もいたので、今後は職員全体から希望を採り、研修を実施してほしいと思いました。

●当世作業所事情 72

自分たちを律してみる

畑 健次郎

斜め向こうの席から不機嫌そうな大きな声が聞こえてきます。触らぬ神にたたりなしと決め込んでいたのか、連れの女性は黙って相槌をうつているようです。その中年女性のところに店員が注文の品を運んできました。しばらくすると件の女性が店員を呼びました。

「ちよつと、このピザトーストの切り方、おかしいと違う。食べにくいわ」「すみません。フオークをお持ちしましょうか」と店員はていねいに対応しています。「そういう問題と違うやろ」と、その女性の声のトーンはさらに上がります。私はモーニングのパンを急いで食べ、コーヒーを飲み干してそそくさとその喫茶店を出ました。

「福祉業界」のごたぶんにもれず、ゆうとおんの職員の出入りもけつこう頻繁です。

その理由はいくつかあるのですが、待遇、とりわけ賃金の要素は大きいと思います。福祉関係の仕事は、ゆうとおんもそうですが他と比べて低賃金です。おまけに最近はお求人難。働く場所はいくらでもあります。

そして立場的には管理者側であるにもかかわらず、その自覚に乏しい私(たち)の配慮不足もつとに指摘されているところです。

職員間の人間関係も影響しているようです。この点については、最近になって、その要素の大きさを今さらながら痛感させられています。

「あんな意地悪な人(たち)」と一緒に働かれへん」と言って、仕事を辞めた知り合いがいます。そんなものかとは思いましたが、なぜかゆうとおんは違うはずだと思っていました。いくら無知な私でも、ゆうとおんにやってくる人たちが、みんな心優しい人たちだと思っではいません。だけど、障害当事者にかかわるという仕事をおして、他者に対する認識と許容度を深め広げていくはずだと根拠のない希望のようなものを持っていました。

喫茶店のあの女性も、仕事先の人や仕事場の上司にはにこやかかもしれません。ひたすら丁寧な対応の店員も、同僚にはキツイ人かもしれません。

賃金が少々安くても、管理者側がぼんやりでも、人間関係が多少ぎくしゃくしても、それでも働きたいと思えるような仕事場でありたいと思います。

そのためには、ゆうとおんというところが、何処からきて、どんな課題を持っていて、どこへ行くこうとしているのか、そのことをもつとはっきりさせねばと思います。その結果、去る人が出てきたとしても仕方ありません。

ということを出てきたことの 하나가、職員向けの行動指針を作ろうという動きです。作るにあたっては、できる限りみんなの意見や気持ちを反映させようということで、各現場から代表者を出して、策定委員会のようなものを作ることになりました。早ければ正月明け、遅くとも次年度までに出来上がる予定です。

カタイ表現で言えば反差別、少し気恥しい言い方をすれば「共に生きる」ということが、ゆうとおんにとって一貫した課題であり、存在意義だと思ってきました。そのためには、ものが言いやすい自由な雰囲気と環境が不可欠です。

だから、せめて職責による職員間の垣根は作らな

いでおこうと思いました。障害福祉事業に義務付けられている役職以外、例えば主任等はおかないようにしてきました。平場の関係を大事にしたいと思ってきました。理念的なことを除いて、できるだけ「約束事」もつくりないようにしてきました。その結果はどうなっているのかと問われると、現時点では落第点をつけざるを得ません。

具体的な例として、以前からたびたびとりあげてきた呼称問題と親睦旅行の問題を考えてみます。

呼称については、以前からさん付けの方がいいという声が多くありました。私個人の感覚で言えば、基本的にその方が望ましいが、ルールにまでするのは行きすぎだと感じていました。

子どものころ、自分の母親や父親は「お母ちゃん」であり「お父ちゃん」でした。高校生くらいからなのか、「お母ちゃん」という呼び方が出来なくなりました。「お母さん」も恥ずかしい。「おふくろ」なんて呼び方はもっとしっくりしない。

結局、母親が死ぬまで呼び名を口にすることはありませんでした。父親には、もともとほとんど呼びかける必要もなかったから、どう呼べばいいのかなんて考える必要もありませんでした。多く

の場合、父親というのは、自分も含めてついでの存在というところですよ。

相手との固有の関係性や歴史性を捨象してルール化するのには今も疑問がありますが、「放置」の弊害も無視できません。

よく言えば親近感からなのでしょうが、ゆうとおんでは、当事者に対して「ちゃん」付けが横行しています。当事者間でも、自分より年上の人に対して呼び捨てにしたり、女性を下の名前で呼ぶ人もいます。それはそれで、同じ呼び捨てでも、その人の下意識にかなり強い差別意識が含まれていることもあれば、異性に対する興味や憧れのようなものがないまぜになっていることもあります。それでも聞いていて、どちらもいい感じはしませんので、ついつい「注意」してしまいます。意識は知らず知らずに現象します。形式が意識に働きかけることもあります。呼称は悩ましい課題であり続けます。

親睦旅行の話は構造としては、もっとシンプルです。「みんなできつくる働く場」として出発したゆうとおんの親睦旅行は、その旅行にかかった費用を、参加者で等分するのは当たり前のことでした。社会福祉法人化の前後から、職員にとっては「親睦旅行」というよりも「泊りがけの仕事」と

いう感覚にシフトしていきます。「それが実態やないか」という声が聞こえてきそうです。そうした意識の変化にも対応して、何年か前から職員の参加費を半額にしました。最近「参加費を払うのなら参加したくない」という職員の声があると聞きました。後を振り返るべきか、いけるところまで走り続けるか、思案のしどころといったところです。

いろんな意味でゆうとおんは岐路に立っています。

「理念」でねじ伏せる手法は「理念」に背きます。まどろっこしくても「対話」をつづけていくしかありません。理念と活動内容の橋渡しになるような「行動指針」を作り出したいものです。変わらぬ思いを大事にするためにも、時代や意識を読み解く努力が求められています。

「できることはいいことだ」という幻想に依存したり、その延長線上に「訓練」のための訓練や、「約束」のための約束を設定したりする愚には走らず、「生きる力」を当事者と共に獲得していけるようなゆうとおんでありたいものです。



ゆうとおんの思い

活気があるけれど ゆたかりささ

真剣だけれど かたくなさくなく

つらあつたさうな

心と体がホッとする

どこにでもあつて

どこを探しても なかなかみつからない

そんな しつぱ をつくりたい

ひくじにならず いつまにならず

小さなちがいに らわなず

小さなことも ないがつてにせず

失敗も たくさして

どんぐりになつてい

一九九六年 設立

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円

職員研修のお知らせ

◆10/12(金)18:00~20:00

「精神科医に銃を」をめぐって

講師：胡桃沢 伸 さん

(精神科医)

場所：は一と食堂

◆10/19(金)18:00~19:30

「虐待は、なぜ起きるのか」

講師：本間 亜紀 さん

(大阪弁護士会・弁護士)

場所：は一と食堂

◆11/15(木)アイヌ民族交流会

場所：は一と食堂

一部 15:00~15:45

毎年恒例の唄と踊りでゆうとおんメンバーを中心にした交流会

二部 18:00~20:00

川村シンリツ・エオリパック・アイヌさんと平田幸子さんのお話を伺った後、その日に作ったアイヌ民族の料理を食べながらの交流会

バザーのご案内

12月1日(土)10時~14時

場所：ゆうとおんほーぷ (八尾北高校の南側)

社会福祉法人 ゆうとおん

本部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784
 ゆうとおんは一と / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387
 メールアドレス / youtone@live.jp ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>
 年会費 / 1口 2,000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4階

定価 / 50円